

上 善, 水 の 若 し

— クリストリープ・ヨープストさんのこと —

塩 田 勉

初めてお会いしたのは四十年近く前、七号館の部屋に十人近く詰め込まれていたころだった。四人部屋になってや、落ち着いたころ相部屋を訪ね、ふと書架をのぞくと空海の『三教指帰^{さんこうしきき}』が目に入った。ほう！と思ったそのとき以来、空海との因縁をたずねる暇もなく歳月は激しく流れた。定年が間近にせまったある日、お会いする機会をえて、長年、想像のうちに育ってきた疑問をたしかめることができた。ヨープストさんは、若葉色の背広に若草色のネクタイをしめ、おしゃれないでたちである。

いいコーディネーションですね、という、にっこり笑ってヨープストさんは、額に入った絵をもってきた。幼年期から青年期を過ごしたアウグスブルクの銅版画である。古い都会の芸術的雰囲気や、実家で運営していた文化センターの様子、ヒトラー時代を生き抜いた筋金入りのご両親の思い出が淡々と語られはじめた。初めて聞く話だった。

ヨープスト家代々の故郷アウグスブルクは、ドイツ南部バイエルン州、レッヒ河とヴェルタハ河が合流する場所にある。河はアルプスを越えイタリアに通じ、海外への出入り口はヴェニスだった。ローマと太い絆でむすばれたアウグストゥス帝時代、ローマ軍の駐屯地となり、皇帝の名前にちなんでアウグスブルクと命名された。司教座もおかれ、司教ウルリヒは国王オットー一世と結んで、侵略するマジャール人を撃退した話は有名である。ヨープストさんが、ゲルマン文化とローマ文化が融合する都会で芸術的センスと宗教的感受性を培ったことを知ると、おおらかな教養人の素顔が明瞭に浮かび上がってきた。

お父上は、当時のインテリの多くがそうであったように共産党員だった。母上は、ジャーナリストで、カルチャー・センターを経営しておられた。ヨープスト家は進歩的文化人のたまり場となり、ヘレン・ブラバッキーやアーネン・ベサントを論じ、シュタイナー思想の講演や、詩の朗読、百人規模のコンサートがもようされる市民のサロンの存在だった。しかし、ヒトラーの時代がおとずれ、ゲシュタポがヨープスト家に踏み込む。思想書は焚書され、お父上もゲシュタポに連行、監禁された。

気丈な母上は泣く悪夢のような光景をヨープスト少年は克明に記憶している。しかし、両親ともに市民の人望が厚く、レジスタンス組織にもいた堅固な絆にささえられた。ヨープストさんの言葉をかりれば、「ヒトラーの悪い種を滅ぼすために、父親に生き残れ」と隣人に励まされ、お父上は、市民のネットワークによって、毎夜、収容所からもどされ、妻との証言が食い違わないよう打ち合せする機会がつくられた。朝になると父上は収容所にこっそりもどされる。市民の命がけの働きで父上は命拾いできたという。戦後、お父様は、ソ連の政権下で精神文化が破壊されている事実を知り党を離れたが、その後もシュタイナー教育の衣鉢を嗣ぐ文化活動を続けられた。

そうしたヨープスト家のカルチャー・センターに、ある日現れたのが、ワルター・ドーナット氏だった。二十年間日本に滞在し東大で教鞭をとった日本学者はそこで禅について講演した。それが日本への導きとなった。日本を知ろうとすると英語文献ばかりだったからたちまち英語もマスターした。すでにヨープストさんはギリシア・ラテン語を教える高校の先生として働きはじめていたが、ある日、DAADのスカラシップに応募したところ日本部門の奨学金を獲得することができた。そこでボン大学に二年通い、日本語と日本文学を学んだ。おりしもボン大学に留学していた早稲田大学文学部の山田広明教授や理工学部の中村浩三教授と出会えたのは奨学金がもたらした幸運だった。

中村浩三氏は、児童文学の翻訳で知られた独文学者で、語学教育にも見識があり、語学教育研究所の所長として職

場を刷新した器量の人だった。中村氏は、ひたむきな日本文化への情熱と、ギリシア・ラテン語の広い素養をもち、囚れのないヨーブスト青年が一目で気に入った。すぐに、独りっ子だった息子を手離して早稲田に送ってくださるか、とご両親を口説きにおもむいた。それが縁でヨーブストさんは、語学教育研究所の属託となり、爾来、早稲田の学生や院生のドイツ語教育はもちろん、ドイツ語教員や哲学教員の学会発表、翻訳、留学など、膨大な研究支援の仕事を無心にこなしつづけた。その尽力のお蔭でどれだけ多くの優れた翻訳書が生まれ、論文が書かれ、一人前の研究者が巣立っていったかわからない。ヨーブストさんは、日本の夏の合宿やアウグスブルクの大学におけるサマースクールを組織し、実によく学生のめんどろを見たと。外国語教員による地味な奉仕は、業績表に載るわけでもなく、恩を受けた卒業生が宣伝してくれるとも限らないから陰徳に終わりがちであるが、無欲な外国人教員の助力によって成長できた我々は、奥ゆかしい貢献を忘れず顕彰するように心がけたいものだ。

ヨーブストさんがドイツ語を教えるようになってからも、仏教に対する関心は薄れず、慶応大学や早稲田大学で茶道や仏教と関わりのある人々と交流を深めていった。いずれお寺で修業したい、という気持ちを知った周囲の一人が、作法がきちんとしていなければお寺では相手にされませんよ、うちの母にお茶でもならってみたら、とすゝめ、師匠の免状がとれるまで茶道に励んだという。そういう縁で知り合ったのが、池の坊茶道の師匠である奥様だった。奥様の父上が朝日の記者から禅僧に転身された方だったのも偶然ではない。一方、ヨーブストさんは、教員を対象としたコンサルティング・アワーを活用して、文学部の哲学教授川原栄峰氏のハイデッガー研究にとことん付き合い、長い間、翻訳事業の支援をおこなった。ある日、川原教授は、お金でお礼するわけにもいかないが、ヨーブストさんから受けた学恩にぜひ報いたい、何かできることはないか、とねんごろに尋ねた。川原教授は、お寺さんの出でもあり、仏教の素養も深かったから、それなら真言密教のテキストを教えてください、とヨーブストさんはためらいなく申し出た。

『即身成仏義』の精読が始まったのはその折である。ヨーブストさんは四十八歳になっていた。ドイツで初めて禅と出会って以来、四半世紀が経過していたが、仏教に対する情熱が衰えを見せたことはなかった。空海の密教理論の集約である書を、ハイデッガーを読み切った川原教授と綿密に会談する一方、ヨーブストさんは川原氏から読経の手解きもうけた。しかし、密教の実践を欠いたのでは、読経も『即身成仏義』も理解することはできない、そういう思いが日増しにつのっていく。ある日、一念発起したヨーブストさんは、円通寺にこもり、一番きついといわれる百日の行と経典の試験に挑戦しつづがなく得度した。

僧侶となったヨーブストさんは、自宅近くの阿佐ヶ谷世尊院の奉仕に参加し、観音堂の清掃、観音経の読経や説教を手伝い、群馬の光恩寺では真言宗の声明しょうみょうに加わり、秋の大法要、春の涅槃大法要の結集に出るようになった。長年、取り組んできた空海研究の成果も来年の秋には高野山大学で発表することになっている。ヨーブストさんは、仏教の修業にも学問にも真剣だった。

しかし、ヨーブストさんは、ギリシア・ラテン語の教師を十年間勤め古典に通じたヨーロッパ知識人としての横顔ももっていた。ラテン語がわからないときヨーブストさんに聞けば、たちどころに答えてくれるありがたい先生だったが、何にもまして西洋古典が身についていると感じさせたのは、他人やものごとの良し悪しを簡単には決めない心の柔らかさと深さだった。ご本人によると、よくヘレニストだと言われるそうだが、アレキサンダー大王がペルシャ帝国の異民族の宗教を許容し、自らも土着の宗教や文化に敬意を払ったように、シルクロードを開いたギリシア人たちは、アテネからガンジスにいたる広大な空間を、おおらかで懐のひろい新文化で満たした。そのヘレニズムの精神は、ギリシア・ラテン語の文献が教えてくれたものだ、とヨーブストさんは述懐する。

同時にそれは、仏教の教えにも通じていた。「喜怒哀楽は本来の自分ではない。感情は心の天気すぎない。雲の上にはいつも青天が広がっていて、それが本来の自分である。欲や悪しき感情は、脱ぎ捨てやめることのできる、自分ならざる悪習にすぎない」、そう仏教は教えているからだ、とヨーブストさんはいふ。

そもそもヨーブストさんが空海を選び取ったのも、ヘレニズムにみられるコスモポリタンの精神と無縁ではなかった。空海は、九世紀初頭、「入唐求法」の心をもって多様な人種や文化が入り混じる国際都市長安にわたり、そこで密教や哲学はもちろん、土木工学、薬学、書道にいたる万学を吸収したルネサンスの普遍人のような人物だった。「虚しく往きて実ちて帰る」という空海の言葉からもそれは見て取れる。

空海も融通無碍の天才だったが、東西の思想をこだわりなく泳ぎ回り、創造的に融合させる感性は、古代ギリシア人が東洋の遠征先で帰化し、狭い民族感情に囚われず東洋に溶け込み、ガンダーラ美術を生み出していったヘレニズム時代のギリシア人の心にも通じる。アポロ像を仏像として生まれ変わらせた古代ギリシア人の生き方は、古典古代に学び、真言密教で得度したヨーブストさんには、我がことのように思えたに違いない。同時に、それはローマのカトリック文化圏と、ゲルマンの新教文化圏の解け合う環境が培った宗教的寛容さにもまっすぐ繋がっているだろう。

ヨーロッパ精神の真髄を知り、仏教にも帰依して、日本人研究者を無心に支えてきたヨーブストさんは、齢を重ねるにつれ教養が光り静まるように陰影を深めていった。上善水の若し、無欲で目立たず、研究者を縁の下から支える仏様のような同僚が去る日が近づくと、観音像を失った伽藍さながら、喪失感は静かに沁みわたってくる。

(2005.12.26.)

クリストリープ・ヨープスト 教授 略年譜

1936 ドイツ生まれ
München/Bonn大学で西洋古典文学・日本語・日本文学を研究
1964 来日
1965～ 早稲田大学に勤務
1973～2006 専任教員
現職 早稲田大学国際教養学部教授
専門研究：ドイツ語教授法・真言密教学



Christlieb Jobst

業 績

学位〔修士〕に相当する論文 ホラチウスとアルヒロホスの詩の比較について

1959年10月 ミュンヘン大学古典文学研究所

(論文) 日本におけるドイツ語授業の経験を基に

1967年12月 早稲田語研 ILT ニュース34・35号

1970年11月 “形の文化”を固守る日本人

東海教育研究所 望星11号

1972年12月 現代日本における茶道の意義

早稲田語研 紀要

1976年4月 Teezeremonie und Ikebana im heutigen Japan

[現代日本における茶道と華道]

Erdmann社 Japanführer

1980年11月 Befriedigung aus Tee und Blumen – Traditionelle Formen der Selbstverwirklichung

[茶道及び華道による充実感－伝統的な自己実現の形式]

Erich Schmidt社 (“Die Frau”) ドイツ東洋文化研究協会

1993年3月 Übersetzen bedeutet in eine andere Sprache über-setzen

[“翻訳”というのは異国の領域へ“引っ越すこと”です]

早稲田語研 30周年記念論文集

1998年12月 言語習得に当たっての音読の意義－音読講座を十年間担当して－

早稲田語研 語研フォーラム第8号

2005年3月 “Vom Weisheitslicht des Sonnenbuddha inspiriert”.

[大日如来の知恵を得て…人智学と仏教の相違点及び一致する発想]

Goetheanum Journal

2006〔予定〕 仏教經典の文化相違による解釈問題。弘法大師著作の独訳を例として。

密教研究 第39号

(報告) 理解は常に達せられるものか？

1971年1月 早稲田語研 ILT ニュース40・41号

1972年4月 1971年10月19日～23日吉野において開かれた日本在住

ドイツ語教員の集会について

クリストリープ・ヨーブスト 教授 略年譜

- 早稲田語研 ILT ニュース43・44号
1976年 3 月 1975年度語研ドイツ語合宿報告
早稲田語研 ILT ニュース59・60号
1987年 3 月 Ham's dös no net gwußt, daß's Eis imma noß is ?
[氷はいつも濡れてるって知らないの?]
早稲田語研 ILT ニュース81号
- (共 著) Deutsch für Anfänger (Übungsheft)
1968年 6 月 文林書院
Streiflichter auf den deutschen Alltag
1969年 6 月 文林書院
Alltagssituationen im Gespräch
1969年 2 月 早稲田語研
- (共同研究・共訳・解説書)
Kôbô Daishi Kûkai – Ausgewählte Schriften
[弘法大師空海・即身成仏義・声字実相義・ウン字義・般若心経秘鍵のドイツ語訳及び解説]
1992年 Iudicium 社
- (翻 訳) 禅・一点からの道 [ドイツ語訳]
1980年10月 曹洞宗宗務所